



みやこ

京まなびい ニュースレター

News Letter

京都市教育委員会事務局生涯学習部

京都の自然・まち・人々が育んできた日本のこころ

～私たちの身近にある神社仏閣 改めて学び直してみませんか？～

京都の歴史に息づく神社仏閣。でも、身近すぎてかえって行く機会がないという方も多いのではないのでしょうか。世界が憧れる京都。京都の歴史や文化を海外の人や次代に伝えられるよう、私たち自身の文化を改めて学び直してみませんか？

京(KYO)も学んじゃおっ!「清水寺」編

現在、「平成の大修理」が行われている「清水寺」。京都市社会教育委員でもある清水寺 執事補 森 清頭氏の案内のもと、特別に「清水の舞台」で有名な本堂の屋根の修理現場と境内を取材させていただきました。

檜皮葺

軒先がスパッと切りそろえられ、曲線が美しい檜皮葺[＊]。長さ96cm、幅15cmほどの長方形の檜皮を1.2cmずつずらし、何枚も重ねて屋根にしていくな作業。職人さんは10人ぐらいい、2年かけて作業を行ったそうです。

今回の修理工事を経験した若手職人が、次回50年後の工事で棟梁として活躍することになります。技術が途絶えてしまうと、文化財を守ることができなくなるので、伝統を守り続けるには、図面には表れない、先人から蓄積されてきた職人さんの知識や技術が非常に大事だそうです。



修理中の本堂の屋根



※「檜皮葺」って？
檜の樹皮をずらしながら重ねて葺いていき、竹釘で固定する。檜皮は、生きた木から薄皮を残して外側の皮だけをはがして作る。

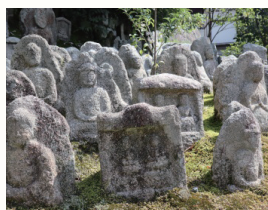
失敗すると
木を傷つけてしまうので、
繊細な技術が必要だね。



やすらぎの場

多くの方が様々な目的で訪れる清水寺。「お寺からすると観光客ではなく参拝者。異国の文化に畏敬の念を持っておられる外国の方も多い」とのこと。「日常の煩わしいことを少し忘れて、花が咲いているな、などと感じて、ほっとしてもらえたら」と森氏。

境内を歩いていると、お地蔵さまの大群が突然現れました。明治の廃仏毀釈で壊されそうになったまちなかの地蔵さまが、市民の手によって運び込まれたものだそう。今でも市民の手によって、大切に守られていました。



千体石仏群

未来のために

修理では、彩色をどのように復元するのも難しいところ。あえて建築当初の彩色を残してある部分もありました。「次の修理の参考にしてください」という、未来へのメッセージなのだそう。

修理中ではありますが、受け継がれてきた歴史や関わる方の苦労にも思いを馳せ、「何十年に一度の修理に立ち会えた」と思ってみてはどうでしょう。

今回、多くの学び、気づきがありました。皆さんも、身近な神社仏閣から、京都の歴史や風土、人々の暮らし、先人の知恵を学んでみませんか。

早朝のお寺は、静かで
張りつめた空気が漂っていて、
おすすめだよ。



当初の彩色が残る奥の院

檜皮葺について知りたい方は…

「京都市文化財建造物保存技術研修センター」

日本の伝統的建築技術を継承していくためにつくられた施設です。技術習得のため、全国から若手の職人さんが来られています。「檜皮の技術は感覚的なところも多く、人の手や目が大切」、「難しいが、やり遂げた時の達成感は大い」とのことでした。一般の方も檜皮の展示見学や檜皮葺体験ができます。

(入場無料)

住所:東山区清水二丁目205-5

電話:075-532-4053

開館時間:9:00~17:00

休館:月・日・祝、年末年始



檜皮を作る研修生

清水寺の
すぐ近くだよ

もっと学びたい方は…

京の冬の旅

～京都にみる日本の文化～

1~3月、普段見ることができない文化財の特別公開等があります。今年度のキャンペーンポスターに京都市社会教育委員会のお二人が登場しています。この機会にぜひご覧ください！

片山九郎右衛門氏
(同志社大学 日本語・
観世流能楽師)榎木良子氏
(同志社大学 日本語・
日本文化センター嘱託講師)

第54回京の冬の旅

検索

京都市社会教育委員のコラム

まなびいの

つぼ

新たな知への問い

京都市社会教育委員 森 清頭 氏 (清水寺執事補, 上智大学グリーンケア研究所非常勤講師)



森 清頭

プロフィール

昭和51年京都市清水生まれ。平成17年立正大学大学院修了、博士(文学)。共著に『清水寺に会いにこないか』ほか。自身が立ち上げパーソナリティーを務めるラジオ番組でJFN賞2019企画部門地域賞を受賞。その他、「暗闇の清水寺」シリーズなどを企画し、初めて観音信仰や仏教にふれる方に、より親しみやすく伝えることに奔走中。

※「社会教育委員」とは？

社会教育法に基づき、生涯学習の計画の立案をはじめ、家庭・地域の教育力の向上や京都の豊かな学習資源の活用など生涯学習全般に関し、教育委員会に助言を行います。(現在17名)

数年前、大学コンソーシアム京都から、清水寺で授業が出来ないかという提案を頂いた。「世界遺産PBL科目」の授業である。PBLというのは「Project-Based Learning」の略で、課題発見・解決学習型の授業である。しかも学ぶ場所は、京都にある世界遺産の社寺城をフィールドとしている。この授業形態に大変興味を持ち、二講座をお引き受けすることにした。一つは、文化財防災学の授業である。清水寺の災害史や消防設備を学び、境内と周辺の清水地域にまで視野を広げ、市民消火栓の場所や災害の危険箇所を見つける。そして最後に、それらの情報を基に災害時の図上訓練を行い講評をする。この授業の特徴は、災害時に命を守るとき、どうすべきか当事者として考えるというものである。もう一つの授業は、自らが清水寺のなかで課題を掘り起こし解決法を絞り出すという、問いも答えも自らが見出すというものである。例えば、「参拝者に境内の観音浄土の世界観をどのように伝えるのか」など、様々な角度から考え調査し課題を探し、答えや方向性を見つけるのである。

この二つの授業に共通する点は、「問い」を持つということである。「問い」とは能動的で、その主体は「私」に他ならない。これらの授業に限らず、学ぶ上で「問い」は心の底



から知りたいという、等身大の私から湧き起こる探究心であり、研究の原動力、原点そのものである。「問い」が無ければ新たな知の進歩は無く、「答え」の単なる伝承に終わる。「問い」を見出すということは、本当にそれを知りたいのか、何故知りたいのかという自らへの問いを重ね思考を巡らせる作業に他ならない。この逡巡が大きいほど、削ぎ落とされた純粋な問いの原点に至り、ひいては大きな答えを得ることが出来る。

数年前の授業で、あるチームが「一千二百年余り前の創建当時と、今も変わらないものは何か」という問いかけをした。結果、「音」という結論を導きハッとさせられた。一千二百年余り前から音羽の滝で霊水が湧き出し、流れる音は幾星霜を経ても何ら変わらない。新たな知に燃える受講生の問いに触発されて、私も大いにあらゆる問いを発したいと思う。

委員からのメッセージ

發心即到

森 清頭

「発心すなわち到る」 自分に内在する問いを発することは、自身の礎となる答えを得る。

「京(みやこ)まなびいニュースレター」の内容についてのお問合せ先

京都市教育委員会事務局生涯学習部(生涯学習推進担当)

京都市中京区富小路通六角下がる骨屋之町549(元生祥小学校)

TEL:075-251-0410 FAX:075-213-4650 メールアドレス:shogaigaku@edu.city.kyoto.jp

京まなびいニュースレター第24号 令和元年12月発行

